

歴博をあるく

沖ノ島祭祀遺跡

広報部会取材

歴博では、平成31年(2019)1月の第1展示室リニューアルオープンをめざして、どんな展示にするか準備を進め、来年5月から3年間、展示室を全面閉鎖して工事に入るそうです。さて、第1展示室に関連して、興味のある情報があります。

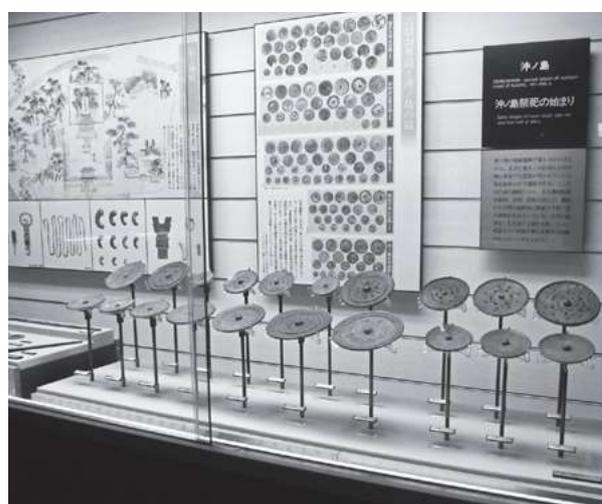
今年の7月28日に、文化審議会は2017年の世界文化遺産の登録を目指す候補として「『神宿る島』宗像・沖ノ島と関連遺産群」を推薦することを決めた。そして、来年2月1日までに正式な推薦書を出すとのことです。第1展示室では沖ノ島祭祀遺物に限らず、各時代の歴史文化としての祭祀(祭り)をテーマにした遺物が展示されています。閉鎖される前に第1展示室を觀賞してはいかがでしょうか。

沖ノ島祭祀遺跡

玄界灘の荒波に浮かぶ沖ノ島(福岡県大島村)は、宗像三女神を祀る宗像大社の沖津宮があり、古くから神が宿る島として信仰の対象となってきました。昭和29年から学術調査の結果、4世紀から10世紀にわたるこの島での神まつりの実態が明らかになり、古代の人々の信仰を知るうえで重要な資料が得られました。

沖ノ島から出土した神様への捧げものには、日本のみならず朝鮮半島、中国大陸、さらには当時のペルシャなど、各地からの豪華な輸入品が含まれます。そのことは、沖ノ島における神まつりが古墳時代以来の国家的な神まつりであり、中国大陸や朝鮮半島との交渉をおこなうときの海上交通にかかわるものであったことを物語っている。

また、沖ノ島は、古代祭祀跡がほぼ手つかずの状態で見つかり、現代でも神聖な島として信仰の対象であることが世界的にみても顕著な事例であること、緩衝地帯の設定を含め十分な保全管理措置が取られていることなどが高い評価を受けているようだ。



沖ノ島祭祀の始まり

沖ノ島の祭祀遺跡で最もさかのぼるのは、上下に重なった巨岩と巨岩の間に多量の宝器類が置かれていた4世紀後半の17号遺跡である。ここでは21面の銅鏡のほか、碧玉製腕輪形宝器類、玉類、鉄製武器など、畿内の大古墳の副葬品に匹敵する質・量の遺物が発見されている。

参考資料：国立歴史民俗博物館ガイドブック

